

# 植民地期朝鮮の公会堂における 近代的催事の市民の享受の実態について

～平壤・大邱の事例を中心に～

井原麗奈

Survey of Modern Events at Local Public Hall in Colonial Korea:  
Case Studies in Pyongyang and Daegu

IHARA Rena

## Abstract

This survey is based on newspaper articles published in Korea from 1920 to 1940. I have collected statistics of events held at local Public Halls in colonial Korea. The events were categorized and quantified to create graphs and I examined what kind of trends there were in terms of these regions. Little analysis has been done on the content of the public hall events. The analysis of events at Japanese Public Halls is limited to only Hibiya Public Hall, Kyoto Okazaki Public Hall, and Otaru Public Hall. The case of Keijo is only a statistic of the number of events, and there is no study the comprehensively analyzes their contents. This data will be compared with the upcoming survey of the other cities.

**Key words:** Colonial Korea, Public Hall, Events

(2023年3月23日受付, 2023年7月5日受理, 2023年9月30日発行)

## はじめに

本稿は1920年から1940年の植民地朝鮮において発行された朝鮮語の新聞から、朝鮮半島の地方の公会堂において開催された催事<sup>1)</sup>の記事を抽出し、内容をカテゴライズした上で、数値化、グラフ化することで特徴を指摘することができるか否かの試論である<sup>2)</sup>。「近代的催事」とは近代的な技術発展を披露する催事(博覧会、物産会、品評会等)、団体の構成員、主催者、参加者の主体性を基盤とする一方で、強制動員も行われたような輻湊的な様相を見せる催事(大会・集会・講習会・委員会・懇談会等)、娯楽や教養を高めることを目的とした教育的な催事(音楽会・映画会等)、地縁、血縁などの

地域コミュニティによって下支えされているものの前近代とは形式を異にする催事(結婚式・葬式等)を指す。既に新義州、木浦、春川<sup>3)</sup>、そして仁川、群山、釜山<sup>4)</sup>は同じ手法で検証済みである。公会堂に関する先行研究は、日本「内地」の公会堂の文化史からのアプローチでは新藤浩伸(2014)、植民地の公会堂の建築分野は西澤泰彦(2008)に詳しい<sup>5)</sup>。筆者のこれまでの公会堂に関する研究では、分析対象として文化史的側面から設置状況や理由、設置背景などにフォーカスしており、公会堂における「公」の意味の分析も設置理由や寄付の状況、施設の間取りや設備面、行幸啓との関係からの分析にとどまり、催事内容からの分析にまでは至らなかった<sup>6)</sup>。公会堂の催事内容については、新藤(2014)の日比

谷公会堂、筆者の京城府民館や京都市岡崎公会堂、旧小樽区公会堂の単独の施設の分析のみで、これらを除いて殆ど解明されていない<sup>7)</sup>。

本稿で分析対象とした資料はデータベース「Naver ニュースライブラリー」の『東亜日報』<sup>8)</sup>である。キーワード検索で「公会堂」とそれぞれの「地名」を入力して得られたデータを対象とした。抽出データはこの研究を始めた2018年時点のものである。その後データベースは資料の発見とともに増加し、現在では『京郷新聞』『朝鮮日報』なども多く含まれる。また国史編纂委員会の「韓国歴史情報統合システム」<sup>9)</sup>や韓国の国立中央図書館デジタル図書館<sup>10)</sup>で『毎日申報』『朝鮮新聞』なども閲覧できるが、翻訳作業の都合上、今回催事の数の統計を取るのには差し当たり『東亜日報』のみを対象とし、他の新聞は事実確認をするために使用した。当該新聞は代表的な朝鮮語新聞で1920年に朝鮮人経営者によって「民族の表現機関であることを自任する」「民主主義を支持する」「文化主義を提唱する」を社是として創刊されたが<sup>11)</sup>、1930年代後半は総督府の影響下に置かれて御用新聞の様相を呈し、1940年に廃刊となった。20年間に複数回の発禁処分や停刊を受けたため、新聞が発行されていない期間がある。前述の拙稿<sup>12)</sup>に「1920～40年の『東亜日報』の発行日数と「公会堂」という語句の掲載数」をグラフにして掲載してあるため、参照されたい。そこからは「公会堂」という語句の掲載頻度が、処分を受けた1930年、1936年、1937年に発行日数と共に下がるものの、時代を経るにつれて「公会堂」という言葉が次第に日常に定着していく様子がうかがえる。

今回対象とした都市は平壤府(平安南道)、大邱府(慶尚北道)で、選択理由は3つある。①はいずれの都市も内陸の要地であり、朝鮮時代の道都でもあったことである。特に平壤は高句麗の都が置かれ、古代以降歴代王朝の西京として栄え、現在は朝鮮民主主義人民共和国の首都である。また②公会堂と商業会議所が併設されていたこと、③府の公会堂以外に朝鮮人集住地域に別な集会施設が設置されていたことである。②の共通点は朝鮮半島の他

の地域でもみられるが、③はこの2地域でしか見られない特徴である。よってこの2都市を分析対象として選択した。

調査対象としている1920～40年には、時期によって比率に変化はあるものの、日本人をはじめとする他民族の居住者が一定数見られる。この2都市の公会堂に関して記事史料から得られた内容を確認の上、分類し、時期や地域においてどのような傾向があるのかを検証した。

日本「内地」も同様だが、「公会堂」は法的設置根拠が無く、『日本国語大辞典』<sup>13)</sup>でも「公衆の会合などのために設けられた公共の建物」という程度の説明である。よって施設の仕様や設備、収容人数も地域によって多様である。植民地期朝鮮の首都に1935年に京城府が設置した「京城府民館」<sup>14)</sup>は1,800人規模の大講堂のほか、さまざまな附属室を併設した大規模な建物であった。一方で農村に設置された「公会堂」は数十名程度を収容する小規模なものもあり、地域によって求められていた役割、果たした役割は一定ではない。今回の調査では、都市の公会堂における催事の多様さの内実を解明したい。

## 1. 地域の特徴

### 1.1. 人口動態

これら2つの都市の特徴を人口動態から見ることにより、タイトルの「市民」の実情を明確にしたい。植民地支配下においては被植民者に参政権はなかったことから、本稿では基本的に「住民」の意味で使用する。植民地期の各都市人口の詳細なデータとして、朝鮮総督府発行の『朝鮮総督府統計年報』がある。新聞記事は『東亜日報』発刊期間の1920～40年を対象としているため、1920年、1930年、1940年の各都市の人口を年報から抜き出してグラフにした(図1)。

平壤府と大邱府の2都市のみで比較すると、平壤府の方が人口規模は大きい。「日本人」「満州人及び中華民国人」「その他」の人口割合を見ると、1930年の大邱の日本人の割合が多い以外に大差は

各都市の年代別人口推移

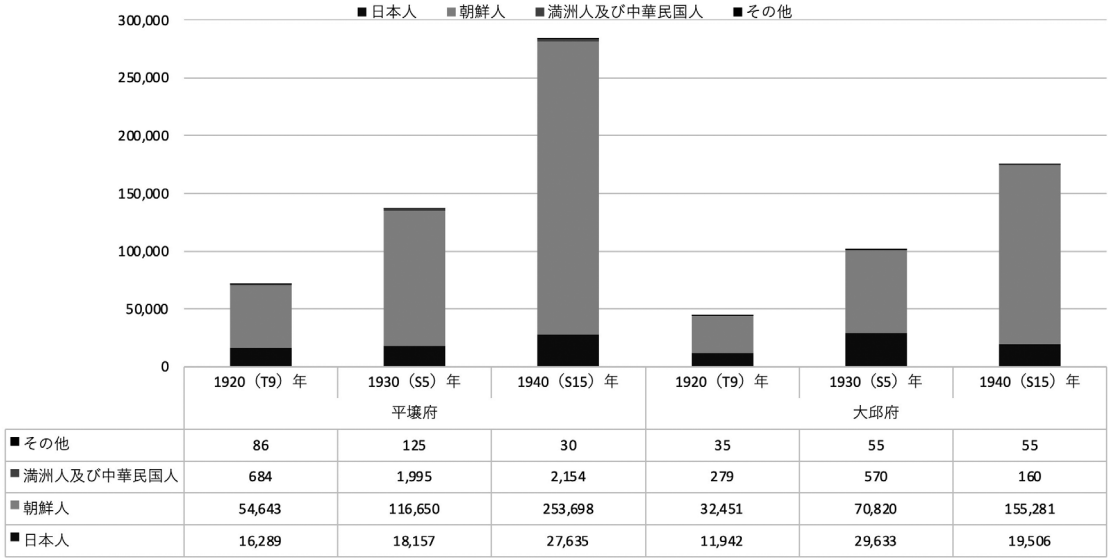


図1 各都市の年代別人口推移

(朝鮮総督府編『朝鮮総督府統計年報』『現在戸口府郡島別』[大正9年版/昭和5年版/昭和15年版]より筆者作成)

表1 各都市の日本人の人口割合

		日本人
平壤府	1920 (T9) 年	23%
	1930 (S5) 年	13%
	1940 (S15) 年	10%
大邱府	1920 (T9) 年	27%
	1930 (S5) 年	29%
	1940 (S15) 年	11%

(朝鮮総督府編『朝鮮総督府統計年報』『現在戸口府郡島別』[大正9年版/昭和5年版/昭和15年版]より筆者作成)

ない。国境に接しているわけでもなく、港湾都市でもないため、他都市(新義州、春川、木浦、仁川、釜山、群山)と比較しても日本人は目立って多くも少なくもない。1930年から1940年の間に朝鮮人の人口が増えたことによって、日本人の人口割合が下がるのも他都市と同じ傾向である<sup>15)</sup>。とはいえ、当該期の朝鮮半島全体の日本人の人口の割合が全体の2~3%であったことと比較するとこれらの都市には日本人が集住し、地域社会を形成していたことがわかる。よって一言で「市民」といってもいずれの都市においても、民族的複合性をもった集団であった。

## 1.2. 各公会堂の特徴

次に調査対象とした各都市の公会堂について紹介する。平壤の事例を見てみよう。平壤における公会堂の歴史は他地域と比較して多少複雑である。平壤府の公会堂が新築移転したこと、朝鮮人の集住地区に別の公会堂が設置されたことから、新聞記事を検索すると、3つの公会堂の記事が混在する結果となる。最初の公会堂の設置は1917年に、大正天皇大典記念として府民の寄附によって「瑞氣山」に設置されたと複数の資料に記載されているが<sup>16)</sup>、1921年まで催事の記事が見当たらないこと、1918年、1919年にも寄附募集の記事が見られることな

どから、誤記の可能性が考えられる<sup>17)</sup>。他の多くの公会堂の場合、落成式の記事によって設置年が特定できるが、この事例では『東亜日報』以外の新聞を探しても見当たらない。唯一『毎日申報』に「平壤公会堂竣工期」（1920年6月8日）という記事があり「目下建設中の平壤公会堂の竣工は本月末頃」という記述や朝鮮総督府の『平壤府 生活実態調査』<sup>18)</sup>には「大正9(1920)年8月設立」と記載があるため、実際は1920年だったと考えられる。

商業会議所と公会堂の併用は植民地朝鮮では数多く見られる事例だが、平壤も例外ではない。しかし平壤の場合、事情が複雑である。1920年8月には不足していた建築費約25,000円を商業会議所で起債し、10年近くかけて償還して行く代わりに府が所有権一切を商業会議所に譲るという覚書が交わされる。朝鮮人側から48,000円の寄付があったこと、商業会議所が日本人と朝鮮人の合同の会議所であることなどが理由だ<sup>19)</sup>。議論が逡巡した末、結局「所有権一切は平壤府にあるが、事務所等は移転の必要が生じない限り使用して良い」という合意が交わされた。商業会議所では会頭が議長となって臨時評議員会を開き、府からは内務部長、理事官が出席し、平安南道知事に諮問した<sup>20)</sup>。起債に反対する者が現れたと記事には書かれているが<sup>21)</sup>、商業会議所側が便宜を図ってもらえるように積極的に行動し、交渉したのか、府側が返済不可能もしくは不必要と判断したのか、背景は不明である。このような複雑な状況もあって、実際に公会堂で催事を行えるようになるまでに時間を要したと考えられる。本稿では「旧平壤公会堂」（以下、旧公会堂/図2）と呼ぶこととし、2章以降の催事の分析も基本的に、この旧公会堂を対象とする<sup>22)</sup>。

1937年5月29日には「新平壤公会堂」（以下、新公会堂/図3）の落成式が行われた。皇太子<sup>23)</sup>降誕記念として設立されたと謳われるが<sup>24)</sup>、実際は土地を所有する軍部が官舎を移転させると主張したことによるようで、1934年から1935年にかけて敷地問題が大きな話題となっていた<sup>25)</sup>。移動先は大同橋から西に伸びる要路（現在の解放山通り）の斜め南側で、旧公会堂と目と鼻の先であった。『平壤



図2 旧平壤公会堂 外観  
（「目で見える昔日の朝鮮（上）」[国書刊行会、1986年]より転載）



図3 新平壤公会堂 外観及び内観  
（「平壤公会堂落成」[朝鮮新聞]1937年5月31日  
韓国国立中央図書館デジタル図書館デジタル資料室所蔵資料より転載）

小誌』<sup>26)</sup>によると、1937年に新公会堂が竣工している。レンガ鉄筋コンクリート4階建。建坪1158坪。大集会室（2000名収容、舞台9間、トーキー映画上演の施設完備）、小集会室、社交室、貴賓室、大日本間、食堂、ほか20余室だった。現在旧公会堂跡地は「解放山」と呼ばれ、政府機関の建物が集中する場所になっている。また新公会堂も近年まで現存したが、現在は撤去されたものとみられる<sup>27)</sup>。

このほか平壤には朝鮮人集住地区に「白善行記念公会堂」と呼ばれる公会堂が1929年5月4日に開館した<sup>28)</sup>。花崗岩造りの三階建の洋館は総建坪300坪余り。1階に図書室、男子室、婦女室、児童

室、事務室、書庫等が設置され、2・3階が集会所（大講堂は1,200名収容）という構造であった<sup>29)</sup>。本稿では存在の確認のみとし、白善行という人物及び設置の詳細は割愛するが<sup>30)</sup>、復元の上、現存し

ていることを記述しておきたい（図4,5,6,7,8）。

次に大邱公会堂について述べる。大邱では昭和天皇の大典記念事業の一つとして1931年に府費及び有志の寄附金約15万5千円で大邱駅前に設置さ



図4 白善行

(「민중을 위하여 공회당을 짓는 백녀사의 특저」)

【東亜日報】[1927年5月1日] Naver ニュースライブラリーより転載)

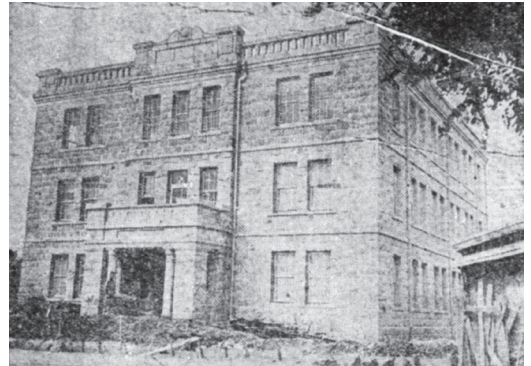


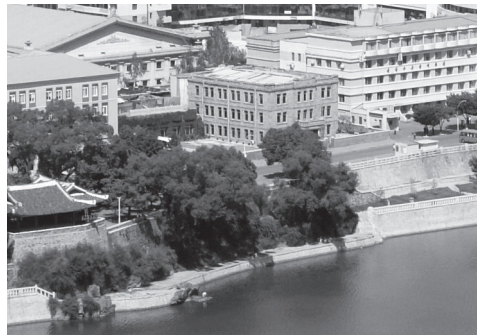
図5 白善行記念公会堂

(「不遠間竣工될 白善行記念館」)

【東亜日報】[1928年10月5日] Naver ニュースライブラリーより転載)



(左上) 図6 白善行記念公会堂 外観 (玉流橋より2018年8月31日筆者撮影)



(右上) 図7 / (下) 図8 白善行記念公会堂 遠景 (主体思想塔より2018年8月31日撮影 / 喜田恵美子氏提供)



対岸の主体思想塔より見て金日成広場から右、大同江の上流に位置する(図8丸の位置)。練光亭に近い。2006年に韓国の月刊誌「民族21」(出版:株式会社民族21)に復元が報道されていることから、2006年には現在の様子になっていたと考えられる。解放後はさまざまな用途に使用されていた。

れた。府協議会で実行委員5名(加藤一郎、韓益東、青木重信、金宜均、立木要三)を選定したとあり、名前から日本人3名、朝鮮人2名と判断できる。落成式まで敷地の選定や予算について府協議会で議論されている様子が記事からもうかがえるが、概ねこの実行委員が中心になっていたと見られる<sup>31)</sup>。大邱は京城、平壤のように前近代に都が置かれた場所でも、釜山、仁川、木浦のように開港場でもないが、朝鮮時代から慶尚北道最大の都市として、また近代以降も1905年に開通した鉄道の京釜線の沿線都市として栄えた町であった。日清戦争前年の1893年頃から租界が無かったにも関わらず法を犯して日本人が住み着き、日露戦争以降は鉄道工事に伴って更に移住者が増加。1904年には既に10,800名程度になっていた。1906年に居留民団が設けられ、1910年に大邱府が置かれた<sup>32)</sup>。

大邱の公会堂設置における過程で特徴的なのは、府が立てた設置計画に商工会議所が客観的な立場から加わる点である。当初はこれまで紹介した事例と同じように商業会議所が主体的に公会堂設置を進めており、1925年段階でも公会堂設置は商業会議所の懸案事項として評議会で取り扱われていたが、なかなか実現しなかった<sup>33)</sup>。

しかし1927年に大きな局面を迎える。慶尚北道が地方費の中から7万4千円を投じ道立商品陳列所を設置することとなり、そこに公会堂を併置する案が浮上する。府側は大典記念事業の一環として新年度予算の中に公会堂設置予算4万円(新町新市場の土地を売却して見込まれる3万円の収入と寄附1万円)を組んだ。また商業会議所が相当額を寄附する代わりに同一家屋内に会議所をも併置する事を要望し、諸団体が相乗りする計画となった。7月には府協議会が実行委員5名(日本人3名、朝鮮人2名)を選定していたが<sup>34)</sup>、その計画は同年12月には反故になり、結局公会堂問題は切り離され、商品陳列所のみが設置された<sup>35)</sup>。

府は改めて公会堂設置計画を練り直し、予算10万円を組んだ。1928年はその用地確保に追われていたが<sup>36)</sup>、結局鉄道局所有の大邱駅前土地に決定した<sup>37)</sup>。

事業推進にあたり碎身していたのは府の営繕主任で「本府の了解を求めべく上城することになつた……」<sup>38)</sup>という記述から、建築案を朝鮮総督府へ提案するために京城へ赴いているとみられ、設置の主体性は府にあるものの上部組織にうかがい立てる必要性が生じている様子うかがえる<sup>39)</sup>。また公会堂の運営経費が府費に毎年計上されているため<sup>40)</sup>、府が主体性を持って管理・運営を進めていることは明らかである。「経常費についてはその一部を大邱商業会議所に貸与してこれによる収入を以てそれに充てる模様である」<sup>41)</sup>「4階及び5階の正面はホテルに、2階の背面は商工会議所に貸与している」<sup>42)</sup>という記述からは、商工会議所の事務所やホテルに空間を貸して賃料を取るシステムを採用していたことがうかがえる。木浦では商業会議所は公会堂の「管理」に任じられていたが、大邱では会議所に「貸与」になっており、また他都市では見られないホテルが備えられたりすることから府側に公会堂を経営する観念が芽生えていると指摘できる。食堂に関してはいずれの公会堂においても経営を業務委託していたことから推測するに、府の直営ではなく委託経営をしていた可能性が高い。ホテルは府の直営で、公会堂の開館と同時に2年後の1933年に建物の4階の3室を8室に改装し、「泊2円乃至3円50銭」程度で整備された(図9)<sup>43)</sup>。

この他、大邱にも府営の公会堂以外に「萬鏡館」と「朝陽会館」という朝鮮人たちの集会施設が存在し、いずれも1922年に設置された。「萬鏡館」は朝鮮人経営者(館主:李濟弼/経営者:玄泳健)による劇場で、主には映画や舞台公演などの興行を行っていたが、朝鮮人たちが民族の精神を固持し、主体性を教示する場として機能した<sup>44)</sup>。「朝陽会館」は中国・満洲などで民族運動を繰り広げていた東亜日報大邱支局の徐相日(東庵)(1887~1962)が「大邱倶楽部」の活動の場として達城公園内に設置したものである。建築費は大邱倶楽部の会員たちが負担し、敷地は徐相日が提供した。大邱の独立運動家の集会の場として、また青年たちの教育の場として利用され「大邱女子青年会」「大邱運動協

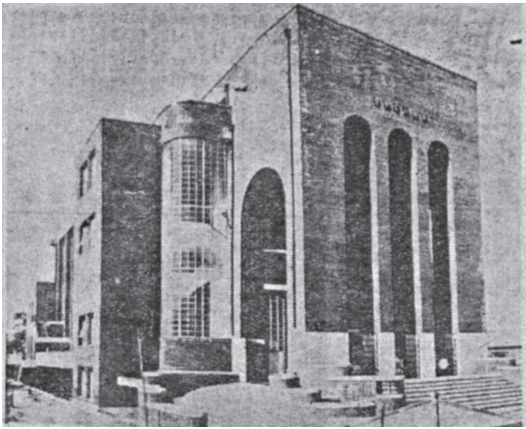


図9 大邱公会堂 外観

〔大邱公会堂落成式〕『毎日申報』1931年11月13日  
韓国国立中央図書館デジタル図書館デジタル資料室所蔵資料より転載



図10 光復館(旧朝陽會館) 外観

(2012年9月19日筆者撮影)

会」「農村奉仕団体」なども入居していた。建物は延べ坪数253坪の2階建てで、外装は煉瓦と石、内部には白頭山の木材が使用されていると言われており、現在大邱の忘憂公園内に「光復館」という名称で移築保存されている(図10)45)。

## 2. 催事内容別に見られる特徴

ここでは新聞記事を催事別に分類し、得られたデータから特徴を指摘する。年代別・地域別の記事数は次のとおりである。記事の総数は平壤157件、大邱140件である46)。平壤は主に旧公会堂の記事を対象としている。新公会堂の催事と明確にわかる記事は4件で、それらは分析対象から省いた。大邱の公会堂設置年が1931年と遅かったため、1920年代の記事の数は少ない。逆に平壤の場合は大邱より設置年は早かったものの、1930年代は移

転騒動の記事が目立ち、催事の記事は大邱より少なかった(表2/図11)。

新聞記事を「経済関係」「普及関係」「地域コミュニティ関係」「行政関係」「設立関係」の5つのカテゴリに分類した。「設立関係」は催事内容と直接関係はないが、住民の関心の高さを測るものとして参考に表示した。また複数回掲載されている同じ内容の催事の開催の予告記事も、当時、その地域で注目度の高い催事だったとみなし、削除せずに掲載回数分をカウントしている。

経済関係の記事と普及関係の記事の多さに加えて、前稿で対象とした新義州、木浦、春川に比べて地域コミュニティ関係の記事も目立つ。各カテゴリの催事内容を記事の多い順に詳細に見ていこう(表3/図12,13)。

まず経済関係を催事内容別に見ると他地域の例に漏れず「大会/総会/集会」、「会議/会合/協議会/

表2 年代別・地域別の記事数の表

時代	大邱	平壤
1920~24年	2	82
1925~29年	10	35
1930~34年	52	12
1935~40年	76	28
合計	140	157

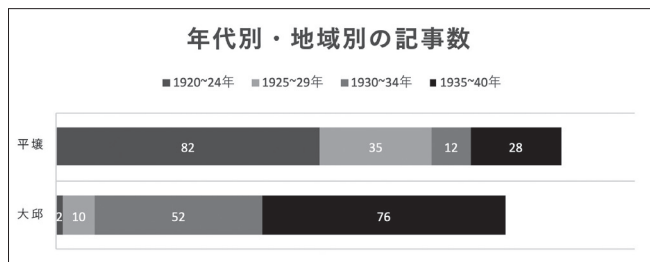


図11 年代別・地域別の記事数のグラフ

例会」の数が圧倒的に多い(表4/図14.15)。この内容を更に詳細にみると、商業的な組合や協会の記事が18件(平壤10件、大邱8件)、うち新たな組合等の発会式、創立式が7件(平壤3件、大邱4件)あった。人口規模(1940年の人口は平壤が283,517人、

大邱が175,002人)や、商工会議所が併置されていたことから考えても、商業的な集会の数がもっと多くても良いはずだが、いずれの都市も圧倒的に少ない。同時期の木浦の人口は約7万人であったが商業的な「大会/総会/集会」の記事数は17件あった。要因と

表3 カテゴリと地域別の記事数

大科目	大邱	平壤	合計
行政関係	5	5	10
設立関係	4	8	12
地域コミュニティ関係	35	51	86
普及関係	45	42	87
経済関係	41	51	92

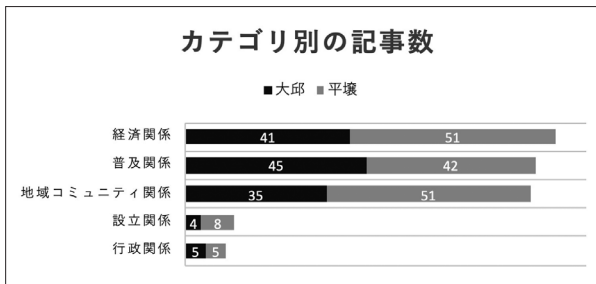


図12 カテゴリ別の記事数のグラフ

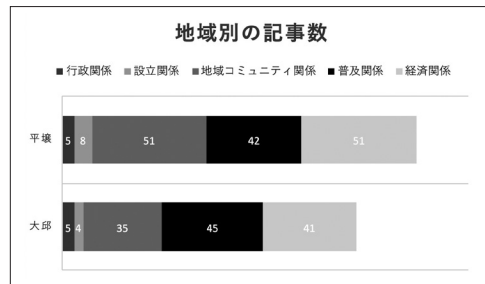


図13 地域別の記事数のグラフ

表4 経済関係の地域別と催事内容別の記事数

中科目	大邱	平壤	合計
共進会	0	1	1
競争入札	0	1	1
講習会	0	1	1
記者会見	0	1	1
試験	0	1	1
調査	0	1	1
式典	3	1	4
懇談会/茶会/座談会	6	1	7
講演会/演説会	0	7	7
展示会/展覧会/廉売会/見本市	1	6	7
選挙	2	6	8
会議/会合/協議会/例会	8	10	18
大会/総会/集会	21	15	36



なる理由が見当たらないため、今後の課題としたい。

次に多かったのは「普及関係」の記事である。2都市で記事数に大きな差はなく、催事内容も他都市と同様に「音楽会/演奏会」「講演会/演説会」が多い(表5/図16,17)。特に注目されるのは柳宗悦

が朝鮮民族美術館建設のための資金を集めるため、妻でアルト歌手の兼子を伴って平壤を訪れている事例である。入場料は1~2円であった。同時に南山岷礼拝堂では平壤キリスト青年会主催で柳宗悦自身の講演会も行われている<sup>47)</sup>。大邱では崔承喜

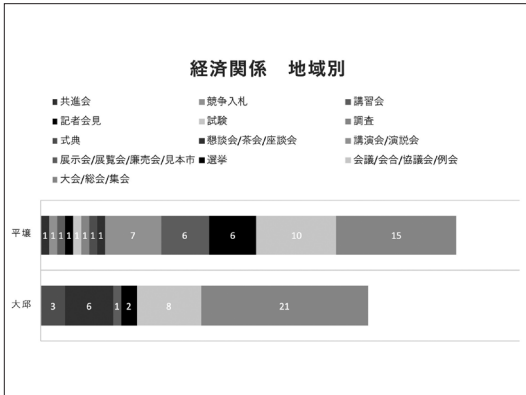


図14 「経済関係」の地域別のグラフ

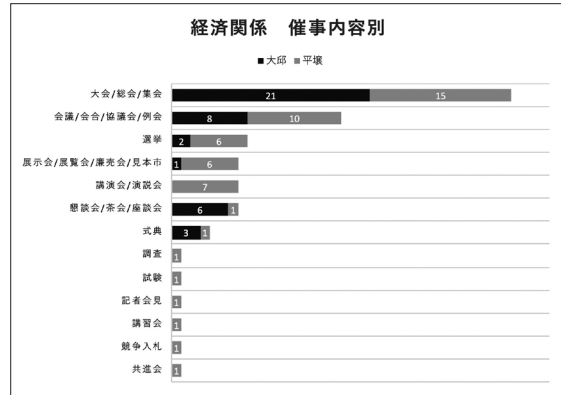


図15 「経済関係」の催事内容別のグラフ

表5 普及関係の地域別と催事内容別の記事数

中科目	大邱	平壤	合計
弁論大会/討論会	0	1	1
舞踊/童踊	1	0	1
拳闘 (ボクシング)	1	0	1
演劇	2	0	2
講座/講習会	1	2	3
総合 (音楽・舞踊・演劇)	0	4	4
映画会	5	1	6
展覧会	8	4	12
講演会/演説会	11	11	22
音楽会/演奏会	16	19	35

(「総合」は歌、踊り、演劇などジャンル混合の催事)

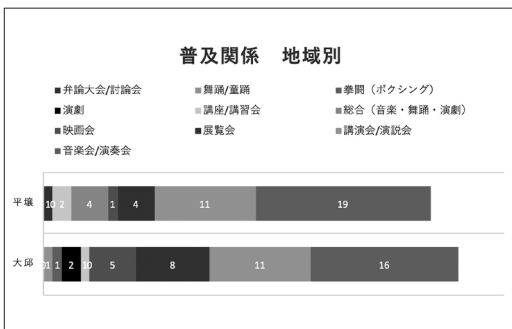


図16 「普及関係」の地域別のグラフ

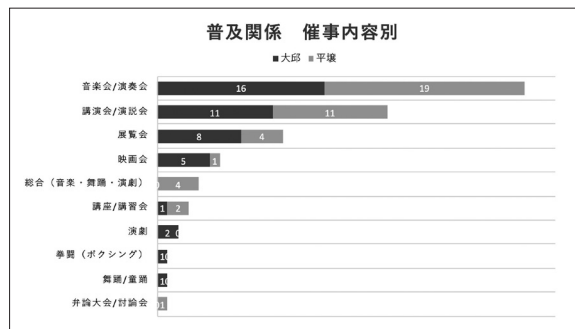


図17 「普及関係」の催事内容別のグラフ

と共に石井漠に師事し、朝鮮近代舞踊手として活躍した趙澤元の舞踊公演が、渡米前の送別舞踊会として雑貨商同友会の主催で行われた<sup>48)</sup>。

講演会で特筆すべきは1937年7月に日中戦争開始直後であるにも関わらず、平壤、大邱共にヘレン・ケラーが訪問している点で<sup>49)</sup>、この2都市以外にも京城、釜山を回っている。その直後から大邱では時局を反映した講演会が増えている。また他都市と異なるのは共に展覧会が多い点である。純粋な書画展もあるが、博覧会のような物産陳列もある。普及啓蒙的な目的も高いと判断し、経済関係ではなく普及関係に分類した。

さらに普及関係の催事を目的別に分類した(図18)。「教育/啓蒙」目的の催事が最も多かった。これも他都市の事例と相違ない。内容も様々だが特に学校や新聞社が主催者の演奏会、講演会が多い。『東亜日報』を分析しているため東亜日報社が自社の媒体に広告や記事を載せ、主催する催事が多く挙がってくるが、当然対象は読者であるため、朝鮮人住民も対象としていたと理解できる。一般・学生料金の設定もあることから、対象は青少年以上と見られる<sup>50)</sup>。啓蒙や知識を増やすことを目的とした「講演会」「講座/講習会」や互いの意見を聞き合う「弁論大会」もここに分類した。また目立つのは他都市と比べて「布教」関係の催事が多い点である。大邱では仏教、キリスト教(カトリック)、平壤では天道教、普天教などの催事も行われている<sup>51)</sup>。大邱では「慈善」目的の催事が目立つが、これは1934年8月に三南地方<sup>52)</sup>で起きた水害のためのチャリ

ティ公演などである。

次に「地域コミュニティ関係」の記事をみていきたい。これは地域住民の集会和看做した催事内容を対象にカウントしたものである(表6/図19, 20, 21)。平壤では「会議/会合/協議会/例会/委員会/役員会」が多く、大邱では「式典」が多い。大会は共に7件であった。同時期の仁川、釜山の事例では、大会はそれぞれ25件、11件で、それらと比較すると少ない方である。特にこの時期の仁川では仁川米豆取引所の移転問題、釜山では電気・ガスのインフラ整備等を求める府民大会が頻繁に行われていたため、数が多くなっていたが、平壤、大邱ではこの時期に、大きな都市問題が発生していなかったと考えられる一方で、1章で述べたように公会堂の設置や移転そのものが大きな問題だったとも捉えられる。大邱では公会堂設置に関する記事が12件みられることから、そのような指摘も可能だろう。また府営の公会堂以外に民間の集会施設があったことによって、住民運動は主にそちらで行われていた可能性も高い。新聞記事の検索語を変更して、再度調査する必要があるが次稿の課題としたい。

地域コミュニティの催事内容で特筆すべきは、他地域よりも用事が多いが、その中でも特に1926年6月に平壤で行われた「奉悼」は純宗皇帝のためのものである<sup>53)</sup>。

最後に行政関係の催事をみていきたい。数が少ないためグラフではなく表で著した(表7)。大邱の4回の徴兵身体検査は第20師団によるもので、1938年から1940年に集中している。朝鮮人日本兵の徴兵は1944年からなので、これらは在朝日本人男性に対して行われたものである。また大邱で行われた協議会は創氏改名に伴って大邱地裁が区町村長及び戸籍書記などを招集し、朝鮮人の戸籍改訂及び姓の変更の問題に関して、事務協議を行なったもので<sup>54)</sup>、催事に時代が色濃く反映されている。

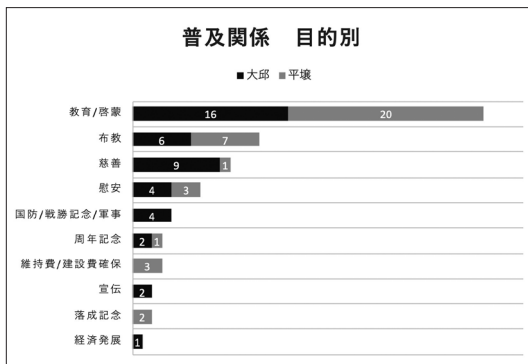


図18 「普及関係」の目的別のグラフ

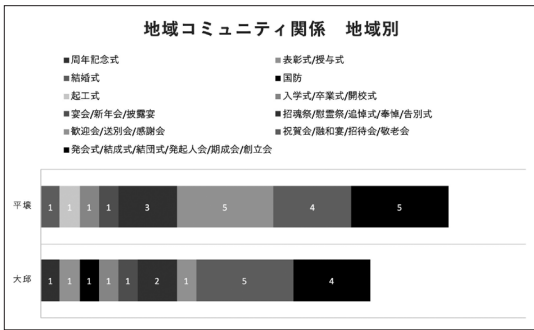


図19 「地域コミュニティ関係」の地域別のグラフ

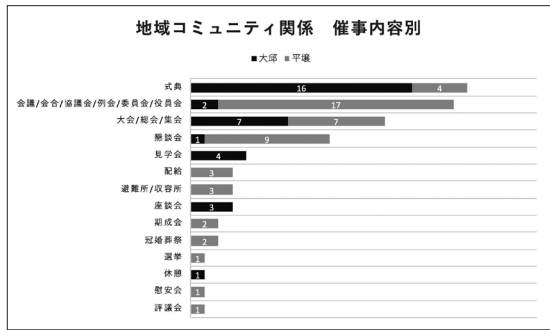


図20 「地域コミュニティ関係」の催事内容別のグラフ

表6 地域コミュニティ関係の地域別と催事内容別の記事数

中科目	大邱	平壤	合計
評議会	0	1	1
慰安会	0	1	1
休憩	1	0	1
選挙	0	1	1
冠婚葬祭	0	2	2
期成会	0	2	2
座談会	3	0	3
避難所/収容所	0	3	3
配給	0	3	3
見学会	4	0	4
懇談会	1	9	10
大会/総会/集会	7	7	14
会議/会合/協議会/例会/委員会	2	17	19
式典	16	4	20

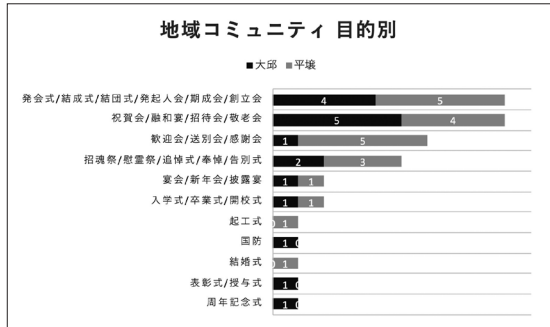


図21 「地域コミュニティ関係」の目的別のグラフ

表7 「行政関係」の地域別・催事内容別の表

中科目	大邱	平壤	合計
式典	0	1	1
協議会	1	0	1
税務相談/税務文書展覧会	0	1	1
事務所移転	0	1	1
予防接種	0	2	2
徴兵検査	4	0	4

### 3. 公会堂に集ったのは誰か

それぞれの都市で日本人の集住地区と、朝鮮人の集住地区は概ね分かれていたため、コミュニティも別々に存在した。今回対象にした平壤や大邱などのように、各々のコミュニティに公会堂が存在したことが明確にわかる地域もある。しかし日本人集住地区の公会堂に朝鮮人が全く出入りしていなかったとも言えない。このことについては前稿<sup>55)</sup>でも新聞記事に見る朝鮮人名から言及したが、今回は別な角度から考察してみたい。平壤で公会堂問題

が揺れていたと思われる1921年に「朝鮮人の評議員が日本人の3分の1しかいないのは不服である」「公会堂も朝鮮人もお金を出したのに自由に使わせてもらえない」「自分達の公会堂を建てるまで夢を諦めない」などの趣旨の記事が掲載されている<sup>56)</sup>。また1923年には商業会議所内で問題が紛糾している。新聞記事には「官庁の干渉がひどく、また各種非難が多くて、朝鮮人委員たちは面倒だと感じているだけでなく、あらゆる制度が日本人を主にして朝鮮人は従とみなしているのは事実であり……(後略)」<sup>57)</sup>という内容や、公会堂をはじめとする生活インフラ

が新市街に偏っていることに対する朝鮮人側の不満が述べられている<sup>58)</sup>。このような背景によって白善行記念公会堂が設置されたと考えても納得できる。日本人と朝鮮人が、どの程度混在していたのかを知るために、先行研究の平壤の居住分布図に公会堂の位置を載せてみた(図22)。

この図から推測するに新旧公会堂を一部の朝鮮人は利用することもあったと思われるが、白善行記念公会堂を日本人が利用したとは想像し難い。図1でも示した通り1930年の平壤の朝鮮人の人口は116,650人、日本人は18,157人で数から見てもマイノリティである。植民地で日本人が虚勢を張って生きていたとはいえ、他民族の集住地域に入り込むほどの勇気があったとは思えない。平壤の場合、一部日本人と朝鮮人社会の混在はあったものの、生活インフラには偏りがあったため、別途、朝鮮人集住地域に集会所が設置されたと考えられる。ちなみに大邱の朝陽会館、萬鏡館は公会堂より前に設置されていたため、平壤のようなコンフリクトは見られない。今後は公会堂のみではなく、地域に存在した他の集会施設にも目を向けたい。植民地支配下であるため、公共性の条件である完全に「開かれた場」とは言い難いが、公会堂には「閉域」<sup>59)</sup>をも内

包した特殊な場が展開されていたのではないかという視点のもと、どのように公論が形成されていたのかを具に検討・検証したい。

また日本「内地」では行幸啓や即位・成婚などの皇室イベントを契機に公会堂が設置される場合が非常に多いが<sup>60)</sup>、筆者は朝鮮半島ではそのような状況がほとんど見られないと理解していた。前稿<sup>61)</sup>では「管見の限り本文の春川以外の事例では平壤旧公会堂が大正天皇、清州公会堂が昭和天皇の大典記念として設置されたのみ」と記載したが、今回の調査で新平壤公会堂、大邱公会堂も皇室行事を契機に設置されたことがわかり、また1938年に大邱公会堂に東久邇宮妃が宿泊したこと<sup>62)</sup>、1929年に閑院宮が鎮南浦公会堂で公職者に謁見したこともわかった<sup>63)</sup>。「大宅・大家(天皇・皇太子=公)<sup>おおやけ おおやけ</sup>」の来訪を機に公会堂が設置され、その「有り難い場所」が広く一般に開かれることによって一般民衆のものになるというプロセスは、「内地」の日本人には共有できる公共性であっても、植民地朝鮮では通用しなかった。」とも記述したが<sup>64)</sup>、皇太子来訪の1907年は公会堂が整備されていない時期でもあり、整備されていれば宿泊もしくは休憩場所として使用された可能性もあったのかもしれない。

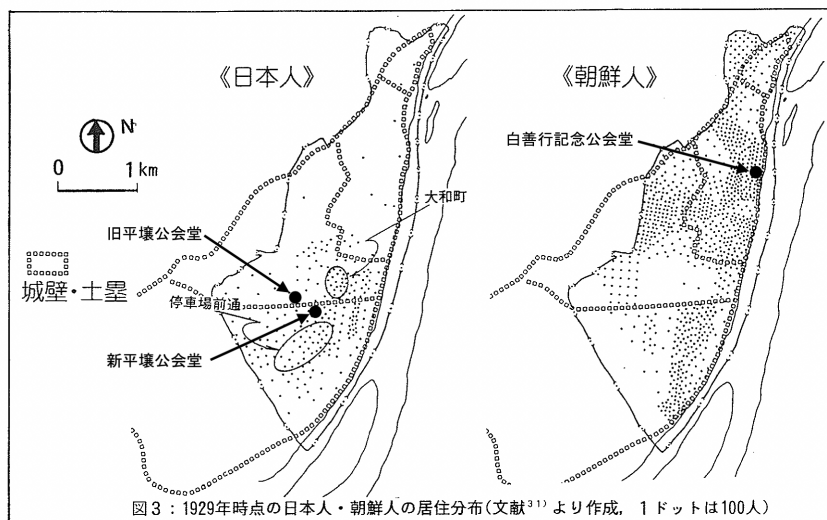


図22 「平壤の1929年の日本人・朝鮮人の居住分布図」と公会堂の位置

五島寧「日本統治下の平壤における街路整備に関する研究」(『土木研究 第14号』土木学会、1994年より転載/公会堂の位置は筆者加筆)  
五島は朝鮮総督府「平壤」63～67頁、1932年を参考に図を作成している。

これについては再検討の必要性を認識した。

## おわりに

各地域に「公会堂」という施設があったことは、建築系の先行研究でも把握されていたが、本研究では、その屋内で何が行われていたのか、都市は限定されたものの、ソフト面から「市民(住民)」の生活の一部を浮き彫りにすることを目標として作業してきた。しかし使用者の姿は未だ曖昧な点もあり催事の「主催者」だったのか、「参加者」だったのかを明確にする必要もあるだろう<sup>65)</sup>。

今回の調査は、2つの前稿<sup>66)</sup>の試論に続くもので、一定のルールを定めた上で詳細に分類すれば地域の特性が見えてくることが明確になったため、ほぼ同様のルールで作業を行なった。しかし新聞記事には「はじめに」で述べたように発禁処分がかかったり、社の方針で書き方が変わったり、重要だと思われる出来事が記事にならなかったりするため、事実を網羅的に把握する媒体としてはバイアスのかかった資料であることがわかった。

今後は今回作業した2都市と既に分析作業が終了した6都市の合計8都市を全体的に見て比較検討する必要がある。人口規模の多い主要都市の作業は京城を残して概ね終了したが、作業途中で清州郡、大田府、全州府、鎮南浦府、咸興府、元山府、清津府などにも公会堂の存在を確認しているため、これらの都市の調査を行うか否かの検討、また皇室行事を契機に設置された公会堂と商業会議所を併設した公会堂に関連性があるか否かの検討も必要だ<sup>67)</sup>。今回は作業効率の観点から『東亜日報』のみを対象としたが、近年デジタル化される史料が増え、アクセスが簡易になっていることから、既に作業が終わった都市でも、改めて見直しが必要であると感じている。また今回データを得ることが困難であった平壤の「新公会堂」についても東亜日報以外の記事を対象にすることで、新たな事実も見えてくる可能性がある<sup>68)</sup>。今後どのように作業を進めるかは、この作業の最終目的もよく見据えた上で、検討したい。

## 謝辞

本稿は科学研究費助成事業の助成金の交付を受けて行なった研究の成果の一部である(課題番号:17K13368)。

## 注

- 1) タイトルに「近代的催事」という言葉を使用しているが、公会堂で行われる催事の内容は、概ね近代国家の成立と経済活動や教育、文化活動の活発化に端を発したものが多いためである。公会堂という施設は近代になってから地域コミュニティに設置された施設である。前近代においては地主の家や庭、野外の広場等に集まっていたが、天候に左右されることが多く、また寺や教会などの宗教施設は祭祀や礼拝などの儀式が、学校は授業が優先されることから、近代において「集まる」ことを目的とした施設の設置は喫緊の課題であった。
- 2) 本稿に掲載している表・グラフは全て筆者作成。
- 3) 井原麗奈「植民地期朝鮮の公会堂における近代的催事の市民の享受の実態について～新義州・木浦・春川の事例を中心に～」『芸術文化観光学研究 第1号』芸術文化観光学専門職大学、2022年。
- 4) 井原麗奈「植民地期朝鮮の公会堂における近代的催事の市民の享受の実態について～仁川・釜山・群山の事例を中心に～」『文化政策研究 第16号』日本文化政策学会、2023年。
- 5) 新藤浩伸『公会堂と民衆の近代——歴史が演出された舞台空間』東京大学出版会、2014年。西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会、2008年(第3章「植民地の社会と建築」第1項「植民地の生活インフラと建築(1)学校・病院・公会堂・倶楽部」)。
- 6) 筆者のこれまでの公会堂研究は前掲書(注3)の注4参照。
- 7) 新藤、前掲注5の第3章「公会堂と催事」。拙稿は前掲書(注3)の注4のNo.1、11、12、13、15。
- 8) [<https://newslibrary.naver.com/search/searchByDate.naver>] (2022年3月3日閲覧)。日本語新聞『京城日報』もデータ化されているがインターネットで公開されていないことや、キーワード検索が出来ないことから調査効率が悪いと、対象から外した。
- 9) [<http://www.koreanhistory.or.kr>] (2022年3月3日閲覧)
- 10) デジタル資料室所蔵資料所蔵資料 [<http://www.nl.go.kr>] (2023年3月12日閲覧)。
- 11) [<https://web.donga.com/damg/history.php?p0=0>] (2022年5月12日閲覧)
- 12) 前掲注3。
- 13) 小学館、1973年。
- 14) 既に「京城公会堂」と呼ばれる施設が存在したため、差異化をはかって「府民館」と命名されたが「公会堂」的な機能を持った集会施設である。
- 15) 前掲注3の111～112頁。
- 16) 平壤府『平壤大誌小誌』1938年、京城朝鮮印刷株式会社『名所旧跡案内 平安南道』出版年不明。

- 17) 「平壤公会堂解決」『釜山日報』(1918年5月31日)、  
「平壤公会堂寄付金」『毎日申報』(1919年2月15日)。
- 18) 1932年、285頁(韓国地理風俗誌叢書/景仁文化社の  
印影版では307頁)。
- 19) 「平壤商議評議員會」『東亞日報』1920年8月22日。
- 20) 「公會堂問題解決」『東亞日報』1921年6月20日。
- 21) 「公會堂問題解決乎」『東亞日報』1921年6月2日。
- 22) この公会堂は瑞気山通山手町に所在したため、「山手  
町公会堂」と呼ぶ資料もあるが、仁川公会堂も山手町  
にあったため、同様の名称で呼ばれていた。混乱を避  
けるため「旧平壤公会堂」とする。
- 23) 平成の天皇。現上皇。
- 24) 「平壤公会堂落成式」『朝鮮新聞』(1937年5月31日)。
- 25) 「公會堂問題와 関連 瑞気山에 官舎移轉」『毎日申報』  
(1934年8月21日)。
- 26) 平壤府初等教育會、1938年、7頁。『平壤大誌小誌』の  
うちの『平壤小誌』に記載あり。(韓国地理風俗誌叢書  
/景仁文化社の印影版では411頁。京城府発行になっ  
ているものもあるが内容は同じである。)
- 27) 2018年8月に筆者が現地調査した際に、新公会堂付近  
は案内してもらえなかった。現在の様子をガイドに尋  
ねたところ「幕に覆われていて工事中のようだ」とい  
う回答だった。改築なのか、解体撤去なのか不明だっ  
たが、Google Earthで調べたところ(<https://www.google.co.jp/intl/ja/earth/> 閲覧日: 2023年3月12日) 更地にな  
っていたため、解体されたと見られる。
- 28) 「白善行開會式盛況」『中外日報』(1929年5月7日) 記  
事が5月7日に発行されているため、この日を落成式  
とする資料が多いが(既出の拙稿でもそのように記載  
した) 実際は4日だった。
- 29) 「不遠間竣工을 白善行紀念館」『東亞日報』1928年10  
月5日。
- 30) 拙稿(神戸女学院大学大学院文学研究科比較化学専  
攻博士論文「1910年前後～1930年代における植民地  
挑戦の公会堂」、2012年)の第二部第二章を参照され  
たい。
- 31) 大邱府『大邱府史』1943年、226頁。府史には「有志」  
の構成員について言及されていないが、新聞記事の  
「實行委員選定」『東亞日報』(1927年7月30日)に実  
行委員5名の名前が記載されている。
- 32) 『大邱府勢一斑』大邱府 1936年、1頁。
- 33) 「大邱商議評議員會」『東亞日報』、1920年9月13日。  
「大邱商議評議會」『東亞日報』1925年5月9日。
- 34) 「實行委員選定、大邱公會堂 建築問題」『東亞日報』  
1927年7月30日。
- 35) 「公會堂은水泡」『東亞日報』1927年12月5日。
- 36) 「大邱公會堂の敷地決定」『朝鮮と建築』(第7輯第6号  
朝鮮建築會、1928年)によると金融連合會前、南町宿  
屋前の空地、東城町守備隊跡の空地など候補地があっ  
た。
- 37) 道が商品陳列所建築用地として鉄道局に敷地借用を  
依頼していた土地で、一旦は朝鮮鉄道自動車会社の車  
庫建築予定地にもなっていた。府尹と会社側との交渉  
の末、公会堂用地として譲ってもらうことになった。
- 38) 「大邱公會堂建設の財源」『朝鮮と建築』第9輯第5号  
朝鮮建築會、1930年。
- 39) 許認可を得るためと考えられる。
- 40) 『大邱府史』(大邱府、1943年)によると、1932年度  
9750円、1933年度11,478円、1934年度6,742円、  
1935年度4,915円、1936年度6,023円。府費に公会  
堂に関する経費が計上されている例は釜山、木浦、の  
ちに京城でもみられる。
- 41) 「大邱の公会堂近く起工」『朝鮮と建築』第7輯第11号  
朝鮮建築會、1928年。
- 42) 『大邱府史』大邱府、1943年、227頁。
- 43) 「大邱公會堂의 四層 大邱호텔 府에서直營」『毎日申  
報』(1933年2月26日)。
- 44) 裴善愛「大邱慶北地域の文化環境と朝鮮人劇場のロー  
カリティ 大邱萬鏡館を中心として」『大東文化研究』  
第72集、2010年(韓国語文献)。「MMC만경관(萬鏡  
館)」という名称の映画館として現在も大邱に残ってい  
る。「萬鏡館」「朝陽會館」では、講演會や集會などが  
行われており、娯楽の提供だけでなく集會施設として  
の機能も果たしている(「萬鏡館」裴論文27～29頁:  
表2/「朝陽會館」「本社主催・夏期巡廻講座」『東亞日  
報』(1935年7月30日)、「歴史講演終了」『東亞日報』  
(1926年8月30日)ほか)。
- 45) 解放後は1953年に徐相日が創設した「源花女子高等  
学校」の校舎として使用された。徐相日の没後は校舎  
拡張のため建設業者に売り渡され、解体の憂き目に遭  
うが、建築資材の質の良さに気付いた大邱市が1982  
年に引き継ぎ、1984年に現在の場所へ移築・保存し  
た。1987年から光復會(独立運動功勞者とその遺族か  
らなる)が入居し現在に至る(現地調査によるヒアリ  
ング[光復會慶尚北道連合支部長: パク・トヌク氏  
/2012年9月19日]より)。
- 46) 検索結果には他地域の公会堂の記事や、公会堂とは関  
係のない記事も含まれるため内容を確認した上で、筆  
者の独断で省いた。そのため検索結果として現れる数  
とは異なる。
- 47) 「柳宗悅氏一行來壤」『東亞日報』(1921年6月6日)、  
「滿場如醉」『東亞日報』(1921年6月13日)、「柳宗悅  
氏一行出發」『東亞日報』(1921年6月13日)。
- 48) 「大邱公會堂서 舞踏會開催」『東亞日報』(1936年7月  
12日)。
- 49) 「廿世紀의 奇蹟聲」『東亞日報』(1937年7月14日/平  
壤・大邱)。
- 50) 平壤の事例としては「平壤秋季音樂 미증유의대음악가  
삼십여명」『東亞日報』(1926年9月1日)[料金設定が  
見られる]、大邱の事例としては「信明校音樂會 稀有  
大盛況」『東亞日報』(1933年12月6日)[学校の同窓  
會と新聞社が主催]などがある。

- 51) 大邱：「大邱佛青主催公開聖劇大會」『東亜日報』（1934年7月9日）、「救世軍參謀總長 曷博士日程」『東亜日報』（1934年2月15日）、「佛教徒의 旗行列」『東亜日報』（1936年2月19日）、「天主教區設置=廿五週年紀念式」『東亜日報』（1936年6月14日）平壤：天道教「壤青年聯合討論」『東亜日報』（1921年6月12日）、普天教「홍치教의 時局大同團 秘密裡에 講演、逃走」『東亜日報』（1925年1月22日）。
- 52) 慶尚道・全羅道・忠清道の三道。
- 53) 「平壤의 奉悼」『東亜日報』（1926年6月8日）。
- 54) 「戶籍事務協議會廿六,七日大邱서開催」『東亜日報』（1940年1月19日）。
- 55) 前掲注3の117~119頁、前掲注4の14~15頁。
- 56) 「平壤商業會議所에 對하야(一)」『東亜日報』（1921年10月1日）。
- 57) 「表面和解 평양 상의 문데」『東亜日報』（1923年3月3日）。
- 58) 「平壤舊市街市民의 不平」『東亜日報』（1923年3月20日）。
- 59) 齋藤純一『公共性』岩波書店、2000年、5頁。「閉域をもたないこと」が公共性の条件であるとする。
- 60) 前掲書(注3)の注4の6、7、8の研究。
- 61) 前掲注3の119頁。
- 62) 「東久邇宮妃殿下의 御日程發表」『東亜日報』（1938年6月12日）、「東久邇宮妃殿下」『東亜日報』（1938年7月3日）。
- 63) 「閑院宮殿下平南鎮南浦を御巡察、公會堂で公職者に謁を賜ひ江西の古墳を御視察」『朝鮮新聞』1929年10月8日。
- 64) 前掲注3の119頁。
- 65) 査読者より示唆を得た。
- 66) 前掲注3、4。
- 67) 注65に同じ。
- 68) 注65に同じ。

## 文献

〈書籍・論文〉

齋藤純一『公共性』岩波書店、2000年

五島寧「日本統治下の平壤における街路整備に関する研究」(『土木研究 第14号』土木学会、1994年)

裴善愛「大邱慶北地域の文化環境と朝鮮人劇場のローカルティ 大邱萬鏡館を中心として」(『大東文化研究』第72集、2010年)(韓国語文献)

〈デジタル〉

Naver ニュースライブラリー [https://newslibrary.naver.com/search/searchByDate.naver] (2022年3月3日閲覧)

韓国歴史情報統合システム [http://www.koreanhistory.or.kr] (2022年3月3日閲覧)

韓国国立中央図書館デジタル資料室所蔵資料所蔵資料 [http://www.nl.go.kr] (2023年3月12日閲覧)

東亜日報 [https://web.donga.com/damg/history.php?p0=0]

(2022年5月12日閲覧)

国立国会図書館デジタル 朝鮮総督府編『朝鮮総督府統計年報』(2022年5月12日閲覧)

・大正9年版 [https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/974937]

・昭和5年版 [https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1443662]

・昭和15年版 [https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1452387]